

# AAF 戯曲賞

The drama competition by the Aichi Arts Foundation

## 第21回AAF戯曲賞 審査会レポート

一次審査会 2021年9月1日

二次審査会 2021年11月7日

<審査員>



(写真左から)

岩淵貞太 (ダンサー・振付家)

鳴海康平 (演出家、「第七劇場」代表)

羊屋白玉 (「指輪ホテル」芸術監督・演出家・劇作家・俳優・ソーシャルワーカー)

やなぎみわ (アーティスト)

進行 山本麦子 (愛知県芸術劇場)

一次審査会、二次審査会共にオンラインで実施。

去る9月1日、11月7日に第21回AAF戯曲賞一次審査会、二次審査会が行われました。今回は国内 外から115作品のご応募をいただき、審査にあたり審査員全員が全作品を読んだ上で議論が行われました。本来非公開の会議ではありますが、審査員の皆様に了承を得まして一部を抜粋してお伝えします。(編集している部分があることをご了承ください)

## 一次審査会 (9月1日)

進行 それでは第21回AAF戯曲賞の審査を行います。昨年からのコロナ禍で公演できない劇団が多かったため応募数が減るのではないかと危惧しておりましたが、今年も全国から115作品の応募がありました。まずは全体を読んでみての所感をお伺いして審査の議論に入っていきたいと思います。

やなぎ 読んだ印象としては、少なくとも去年に比べて、ちゃんとしたドラマ、会話劇が多いなと思いました。理由はよくわかりません。とにかく、コロナの状況に於いてのドラマについては、当然ながら去年よりもずっと練れている。ファンタジーではなく身体化したというか、経験したこととして、生活の中に入っているリアルティを感じました。その分、突拍子もない実験的な作品は少なかった気がしましたね。

岩淵 AAF戯曲賞で評価されている作品は普通の戯曲ではない「戯曲とは何か？」にトライしている作品のイメージがあったんですが、今回読んでみるといわゆる「物語」が書いてある作品も沢山あって、「良いお話」をどう評価して良いか、と考えながら読みました。審査の中で話しながら考えていきたいと思っています。20代前半でしっかり書いている人が見受けられて面白いなとも思いました。この戯曲賞の応募者の幅、年代・全国各地からの応募があること、演劇活動をしていないけど書いている人がいるのにもびっくりしました。バックグラウンドとしてどんなモチベーションで書いて送っているのか、どんな気持ちで書いているのかな…。それから、踊りのコンペの審査でもよく話題になるのですが、表現物が自己セラピーに止まっているように感じるものについてどのように評価するのか、も考えましたね。開かれているもの・個人的なものをどう評価するか。

鳴海 確かに、いわゆる物語もの、どういう物語を書くか？が主眼になっている作品が例年に比べて多いなとは思いました。毎年大きな物語は一定数あるので、割合的に大きな変化ではないわけですが…。大きな物語と、それに批判的な立場を取っている作品が乱立する中で、どのような戯曲を書いているのが肝要。翻案物も例年に比べると多かったですね。howの部分我问うもの、whatを問うものなど、物語構造の歴史性に向き合っている作品が目を引きました。

羊屋 例えばずっと写真を撮っていたけど戯曲にしてみようというトライをしている人もいて、いつもはもっと煮詰めて作品を作っている人が今回は途中で出してみる、とにかく出してみよう、みたいな気持ちも感じた。例えばレコードやCDについているライナーノーツ、歌詞を読んで全部わかってしまったら音楽は必要ないんだよなあ、と思いつつも、歌詞を読むこともあ

って歌詞の楽しみ方もある。歌詞と音楽、演奏の関係は戯曲と演出、上演されるもの、とも言えるなど考えたりもしました。史実をモチーフにした作品も多かった。私はそれを読んでその先に何かあるのか？と考えてしまうんだけど、その中にも良いなと思うものもあって。

進行 早速ですが良いなと思われた作品、気になった作品はいかがでしょうか。

岩淵 『Yに浮かぶ』は好きな感じですね。今っぽい喋り方、これがリアルなのか？と疑いもありましたが。お客さんに語りかけている戯曲は読みやすい。語る相手がクリアで、中だけで語っているのより安心感がある。土地の話を採用してやってみるとというのが面白かった。時間が横に流れるだけでなく縦に流れて自分の身体に土地の時間を映し込んでいく感じがいいなと思いました。

やなぎ 気になった戯曲ではありますね。高校生と作る演劇、高校生をオーディションして作った作品と書いてあった。一緒にいる時間を長くかけて作っていることが感じられた、高校生たちの戯曲。話し合いの過程を知りたいな。ただ、一つのプログラムの中で作っている事実が気になるころではあります。

羊屋 いくつかの作品で概要などで「事実に基づいたフィクションです」と書いてあるのが結構気になったんですね…『Yに浮かぶ』はそれが書かれてなくて、その潔さ、態度が良いなと思った。

やなぎ 設定が面白いと思ったのは『In the Cage』。時事的なステイホームの状況が見え隠れしていて面白いと思う。劇場で上演するとなると、劇場は絶対的に内側なので外側のない嘘になるが、それを超えて外側/内側が作り出せたら面白いと思います。

鳴海 書きたい内容、当事者性の表現としての面白みはある。ただ、どうしても自分のケアのために書いている筆致と、外部に開かれている筆致とが、有機的にかみ合っていないと感じます。

羊屋 『ドレスショップ・アヌビス』がよかった。「ガザの美容室」を思い起こさせられた。場所がどこかよくわからない、日本でもなさそう。ドレス屋さんの外で大変なことが起きているんじゃないかとも思われる。どんな人が書いたんだろう…。あと、『鮭なら死んでるひよこたち』。『寿歌』系と呼べるような変な話！

やなぎ 『鮭なら死んでるひよこたち』ね。タイトルも変だし(笑)、ビジュアル的に好きですね。トランクの中に詰め込まれているカラーひよこ。ヤシの露天商。ひよこの声がかしている。その絵と音だけで立ち上がってくるものがある。懐かしさと世紀末感。美学がある人だと思いました。風来坊っぽい登場人物が公からの「任命」を欲しがったりするなど、時代への批評性もある。勢いに乗っている戯曲です。

『クバハ／クバから』は立派な写真集だなと。以前特別賞を受賞した方ですよね？こういう脚本というか、スケッチというか、ずっと考え続けて手を動かされている事が評価の対象です。「クバ」の印象から出発して、よくここまでリサーチを…。この「しつこさ」を称えたい。

鳴海 私も面白かった。写真家から見たテキスト、上演という形式への可能性をコンセプトメイクから表現に起こしたのになっていて、提出されたテキストと写真にコンフリクトは起きていない。上演する演出家次第で面白くなると思います。上演へのノートも書いてありますし。

やなぎ エネルギー量がありますよね。

岩淵 エネルギー量と言えば『Dokuritsusengen』かな。引っかかる部分はあるけど、それでも何とか成立していると思わせる肉体的なパワーがあった。どうかしようという意気込みもある。結果はまだ捉えられなかったけど。面白かった。とにかくエネルギーを使って書いているのが伝わってくる。ト書きの部分がグレーになっていて、うっすらとしたグレーがバックにある表現に、おっと思った。

やなぎ いくつかの作品でみられた妊娠とか出産を扱ったエピソード。劇場が胎内の空間のせい、普遍的なテーマのせい、昔から戯曲にはとても多い。私は、すでに「子宮もの」「胎内もの」ジャンルとして捉えています。ただ、その子宮的展開は必要かなあ？と疑いをもってしまう時もあるんですよね。水が溢れたり、溶解したり。

羊屋 どういう気持ち？

やなぎ 少々あきあきしてますね。漫画・アニメにも溢れているし（笑）

鳴海 大学生や若い世代からの作品では『ストロー』『Timelineの東』『ぜんぶジョナサンのせい』が気になりましたね。

やなぎ『ぜんぶジョナサンのせい』は、初めて書いた戯曲で、これだけの完成度。応援したいですね。

羊屋 『Timelineの東』のスピーカーに話しかけるところでクスツとなったりして、そういう時間がある戯曲だった。一気に読めた。設定があつてのこの会話、というのも面白いなとは思いました。あと、『アながあくほド』は世の中と自分のことがちょうどいいバランス。私としてはスマッシュヒットでした。すでに垂流が出てきているけど、元祖は違う！『FOREIGNERS』はこういう設定があつたらいいなと思った。

鳴海 確かに『FOREIGNERS』は、一人一人の登場人物が、プロットに奉仕する人物ではなく、誠実に個別の人物として書かれていたのが印象的でした。作家

の言葉の代弁者ではなかったという意味でも。横長のワンシチュエーションの空間設定も面白い。

岩淵 『kq』はほぼダンスだと感じたけどこれを戯曲っていった意味が気になった。戯曲としてどう読めるかという話をしたい。

鳴海 最低限の指定と条件、上演に対する可能性をチームに委ねる戯曲ですね。音に関する指示があるので、私は音楽のイメージが強かった。どう上演を考えるかに関して面白みを感じました。

羊屋 私も良いなと思いました。人のことを何も書いてない。人と物との関係。「戯曲とは何か」も考えられるし、作品として成功する気がする。

『先生の暗いロッカー』はどう？私は主語が大きくなって、上手だなと思ったんだけど。

鳴海 上手なんですよ。伝統的な物語として、とても面白い。

やなぎ 私も主語の小さい作品の深さを感じました。

以上のような議論を経て、下記18作品が一次審査通過作品となりました。

アながあくほド（山縣太一）

In the Cage（萩谷至史）

浦島太郎状態（伊藤浩志）

クバハ／クバから（三野新）

kq（佐々木すーじん）

鮭なら死んでるひよこたち（守安久二子）

事件（村川拓也）

ストロー（小林毅大）

先生の暗いロッカー（田坂哲郎）

ぜんぶジョナサンのせい（菅浩）

象に釘（すがの公）

Timelineの東（川辺恵）

Dokuritusengenn（荒井啓利）

ドレスショップ・アヌビス（茉莉花）

FOREIGNERS（石見真希）

ぺんだんとは みつからない（立田優詞）

ヤツデのころ（大竹竜平）

Yに浮かぶ（藤原佳奈）

## 二次審査会（11月7日）

司会 それでは、第21回AAF戯曲賞の二次審査会を始めます。前回の一次審査で18作品通過しました。前回の審査と、今回の審査のレポートはまとめて公開され、次回の最終審査は公開審査となります。よろしくお願いします。審査に残った作品も多いので、一作品ずつ話し合っていきたいと思います。順番は応募順に進めていきます。

### 『象に釘』

やなぎ 理不尽で不可侵のルールがしかれた世界は、一見、面白く見えたんですが、男女になって凡庸になってしまった。全体的に神様のなものが多い、だからなんかこう、ぐるっと回って男の人、女の人に戻ってくる感じで…。『象に釘』の道具入れは気になりましたが。神様と人について考えるタイミングなのかなと思った。

鳴海 何が書かれているかという点では、よくあるモチーフではありました。

### 『Yに浮かぶ』

岩渕 改めて読み直してこの戯曲自体がかなり好きだなと思った。高校生が語りえない言葉、言えてない言葉の中に読める物があると感じた。自分が住んでいた横浜で土地の話・民話に触れたことはないんですが、アニミズムっぽい、山と山の会話などがあって、出演者がその役になったり、入れ替わったり、民話がこうやって残っていくのが面白いな、ユニークだなと。

やなぎ 私も好きな話。とはいえ判断が難しい。演劇に限らず、アート全般にこういう地域に関わるクリエイションが様々な場所で行われていて、特に教育の現場や子供たちと一緒に作る企画が沢山あるなかでは、良質な作品だと思います。ただ戯曲の大賞となると、迷う部分ではあります。豊橋の芸術劇場という主催があって、子供たちやいろんな受け皿が用意されて出来る事、そのあたりのことをどう判断するか、は気になるポイント。

羊屋     midsummer的な展開になるのか！と思って読んだ。全然違うんだけど  
（笑）土地の物語から戯曲へ、とのはどんどんトライしていったほうが良いなとは思っています。

鳴海     このテキストを考えるにあたっていくつかの軸があると感じました。ひとつは高校生と一緒に土地の民話を上演するためのテキスト、という企画的な機能。これは企画というフレームの話なので戯曲賞としての評価対象にはならないと思っています。評価すべき軸は何を、どうやって、どんな言葉で書いているか。内容は、民話をモチーフに使い、伝承のために参加者=高校生（その企画に参加した当事者）に何がしかを体感させるために書かれている側面もある。再演をするという事になったときに別の人に開かれている効力が薄い。再演の場合、この企画のフレームワークを他の土地でも同じような形でリサーチから実施するのが効力が十全になると思います。ただ、それは戯曲ではなく企画の評価になると思います。

やなぎ    確かに、「この台本を上演したい人はご連絡ください」とオープンになってはいるが、それはあまりないだろうな、と思う。美術でも、地域の人と一緒に作る作品についてどう考えるかという問題があるのと同じで、普遍的な部分が無いと言っているわけではないが、ある一つの枠(企画)の中で作られたものをどう評価するのか。

鳴海     難しいですけど、私としては、企画賞ではないので、あくまで書かれている言葉・内容を軸に評価したいです。

岩淵     好きなので残したい気持ちもあり、でも再演を考えたら初演した時ほどの充実感があるかなとも思います。作者がいない民話を原案として扱っている、それと劇作家がどう付き合うのか。固有名を持っていない作者に寄ってくことができるのかできないのか、語られていく不特定多数のプロセスになる書き方はあり得るのか、という問いに繋がっていくと思うのでそういう部分が面白い。内容としては死者の取り扱いに興味を持っているのでその扱いの手つきが面白かった。

羊屋     戯曲の中で4つくらいの民話を扱って、台詞として入っていますよね。高校生たちが戸惑ったり、何かを決めたりしてきたんだと思う。私はそういう場面を（自分の作品創作の過程で）見てきたこともあって、こういう企画が増えればこういう戯曲も増えてくる、では企画ではなくて作品について、どう評価できるか、戯曲賞の定義にも関わってくるとも思いました。作品ってジャンルのラベリングをされる…今回であれば「企画があってそこからできた作品」というカテゴリー、例えば他には露悪系とか…。でも、ラベリングから逃れたい、カテゴリーを考えずに読みたいなあという気持ちもあります…。『浦島太郎伝説』はみらとみらいを扱っていて、そこには本当は漁村もあって、という事を書いていて、その着想が少し似ているので比べて読んだりしました。結局は戯曲としての強度を問われるようになったときにどう考えるかという話ですよ。

- 鳴海 民話という構造と、ハートフルなエピソード。民話は構造として利用されているのであって、どこでも活用できる良い構造であるともいえます。彼らの生きる不安、存在価値、極端な思考などのモチーフを使って思春期に訪れる悩みをきれいに書いているという印象です。ただ、その手さばきにおいてのみ言うなら、ほかの先行する作家と比肩するものを読み取れないとも感じます。
- 岩渕 高校生のためだけの作品でしょうか？この物語を読んだときに、縛られていない、土地との関係性が薄くなっている時代に、土地との関係を身体でどう体験するのか？という問いへの答え、長い場所の時間の流れとアクセスする方法を感じさせてもらえるとも思った。
- 羊屋 身体に組み込まれている感じとはどのフレーズに感じたの？
- 岩渕 民話のキャラクターに変身したり、植物になったり、ごっこ遊びが体験になっていっている。この身体がこの時間・自分だけの体ではないことを実感できるのではないかと思いました。書かれている高校生の悩みは「そんな事もあったな」と思う内容だけど、遊女になってみたりする中で「あったかもしれない時間」を体感させてくれるところが良い。
- 鳴海 惜しむらくは、前に流れている時間、歴史、神話から始まって、そこに帰っていく、もしくは展開されるのではなく、ほとんどのエピソードが高校生の等身大の悩みに回収されていくことですね。それ自体が悪いという意味ではなく、当地の当事者や地域にとっては効力があっても、マクロに物語論として考えると、どうしてもよくある話に収まってしまう。
- 岩渕 確かに、強烈に体験させるより「良い感じ」くらいのところに持って行っているとは思いますが。
- やなぎ 私は作者が次にどのような作品を書くのが楽しみです。この作品は土地の力、高校生の力を借りているところが大きいので。昨今、土地とかかわって何かを搜索するという企画は増えていますが、関わった作家個人がどういう影響を受けるのか。相性が合う人と合わない人がいて、相性が合う人は企画側の主催がなくても作っていく体力をつけてきているし合わない人はやめる。真っ二つに分かれる分野ですよ。
- 鳴海 当然、企画力と戯曲賞、どちらが上とか下とかはありません。ただ、上演として良い企画と戯曲賞とは、評価する軸や側面が違うとは思いますが。

岩淵 面白いとは思った。縦横の思考がしっかり視覚になっていた。部分的にすごく面白かったので、もっと突き抜けてほしい。観念的な感じもするけどもっと突き詰めれば！と思う。惜しい。

やなぎ 外側と内側の二元論で、少々薄くなってしまっているのが惜しい。でも、自然の中の原子の話は面白い。ちゃんと戯曲にしなくても、もっと観念的なものの羅列でも良かったかもしれない

羊屋 広げすぎて、印象的な言葉を拾い上げてメモしながら読んでいるんだけど、すごく魅力的なトピックが出てきては手放されていて。ネオリベ、AD HD…

やなぎ ぼわっと出ている面白いところと、作者が日常で感じているであろう切実な部分と、引用めいてあまり面白くない解説が交互にくるでしょう。

羊屋 でも、最後ケージが空になっている、というのは好きだな。逃げたのか、何なのか。

やなぎ デストピア小説『1984』を思わせる。でもそこは越えて行ってほしかった。14場、15場あたりは好きですね。律儀に「劇場内でちゃんと始まって終わる」ところに落とさなくても良いと思うのだけど。

鳴海 最後、ケージが空になっているところ、これまで内側だと思っていた人が外側になる、つまり管理者・被管理者、加害者・被害者がひっくり返るようにしたいのは分かる。でも外側と内側にわけるとは、ひっくり返るか、境界線を引き直すことにしかない。二分立構造に縛られてしまっているのが惜しい。いろんな事象、カフカ、ネオリベ、聖書などのモチーフをイメージの借用に留まっているように読めてしまうのも惜しいです。それでも作家が感じている問題意識は重要なことですし、そこに声を上げ続けることが必要なので、今後もその問題意識をもとに作品を書いてほしいです。

## 『ぺんだんとは みつからない』

やなぎ あらためて読んで感動しました。かえるの言葉が強く印象に残ります。ホームレス、コロナ、原発、いろんなことを結構ストレートにラディカルに強い言葉でちゃんと書いてある戯曲は他にはあまりなかった。『ぺんだんとはみつからない』と『Dokuritsusengen』の2作品が同世代の作家で、比較すると面白いなとも思いました。Dokuritsusengenは神話的で抽象的、こちらは日常。タイトルだけは、どうかと思いますけど…まあいいか(笑)

岩渕　そうですね。気になったのは人生ゲームになぞらえていったときに原簿作業員、看護師の書き方が見ている人に届くのかな？人生を人生ゲームのように見てみたら？という視点に先へ進む力を感じない、というか…ルーレットで進んで止まったらというのが…もうちょっと取り扱い方はなかったのかなと。言葉自体は強いんだけど。

羊屋　演出がやりやすいなどは思いました。落語家が二役演じるところとか、演出家として考える部分を委ねているなど。人生ゲームをどう演出するか、をくすぐってくる戯曲。最後どうやってやるのかな…

やなぎ　銃を持つシーン、これをやりたかったんじゃないか、という気もする(笑)ちょっとアングラっぽくもある。銃を持って、どんどん声が大きくなる…。だるい、半分水につかったような作品が多いので、こういう作品を読むとスカッとしますね。

鳴海　語彙数、組み合わせ方には技量とセンスを感じます。言葉の扱い方がとても面白くてチャーミング。人生ゲームの構造に追体験や客観性を感じますが、外側にいるであろう支配するもの、管理するもの、神の視点はある程度語っていない。ゲームのように、誰かにコマを進められ、止まったコマで理不尽な仕打ちを受ける構造の場合、未来への推進力が弱まる欠点を感じます。「女と男」から「女人間」に代わるところに、なるほど、とも思いました。青い鳥のような、探していたものが不要または探すこと自体が業なのか…。私たち人間の業、説明しすぎないセンス、神話は神話、構造は構造として描く温度やさじ加減が絶妙だなと感じました。

## 『ドレスショップアヌビス』

羊屋　アヌビスって死神でもんね。毎回、病気のように推したくなる戯曲があって…(笑)今回はこれですね！

岩渕　最初に読んだときは典型的だなとは思った。ウエディングドレス＝幸せから外れる人にも幸せを、という感じかなと思ったんだけど、読み直したら意外に感じるものがあるな、と。

羊屋　いつの時代なんだとかどこなんだとかが分からない、良さ。この裏側がどうなっているんだろう、とか考えると。面白いなど。「はい、お母さま、いただきわ」などのせりふがコメディエンヌなのか、真面目なのかが分からない。

鳴海　羊屋さんが推す理由はよくわかります(笑)　ただ、典型的な物語であり構造ですよ。世界感、言葉遣い、キャラクター、それぞれ好きなもの

で、好きなもので埋めている印象です。書かれている言葉からは、とても懐かしい…大正ロマン、近世懐古的なもの以上の力を感じにくいです。

やなぎ 70-80年代の文学的な少女漫画のようですね。

### 『鮭なら死んでるひよこたち』

やなぎ ビジュアル的にすごく強い。ひよこのテキ屋を見たことがあるので具体的にイメージできて、作者が鮮明に「見えてる」だろうことがすごく強い。きっと実現できる。ビジュアルだけでなく、任命者・管理者、寄る辺を求める人たちの構造も、面白いなど。タイトルも変なんだけど、独自の何か美学のようなものを感じる。

羊屋 ビジュアルとか、タイトルとか、この人だけが描けている何かをもっと読み込みたくなる。最後の不穏な感じも良い。ラマーズ法、ひよこの声、子供たちの声がロータリーに響き渡る…。昔のアピチャップンのような、それまでのポップなものがなかったことによるような不穏な感じ。

やなぎ 音的にも、ビジュアル的にも、よく考えられている。

岩淵 不穏な感じがする設定とか、人の変わっていく感じとか、隊長さんが変身していくこととか、怖いなど思った。公認される、という部分をポジティブに書こうとしているのが面白い。

羊屋 文体に特徴が無い怖さ…不安になりながら読む感じがまたいい。

鳴海 イメージを濁流のように流していく力強さがありますね。北村さんの「寿歌」や寺山修司と、イメージが似ている部分は多分にあります。作家が見えているイメージを言葉に変えていく力が強いがゆえに、出てくるキャラクターがみんな同じように話すのが惜しい気はします。作家が持っているイメージ・言葉を統制しているコードが狭い。「公認を求める」という部分は不穏にもとれるが、開き直り、割り切りのようにも感じます。

### 「事件」

やなぎ 春秋座で上演した作品ですね。このスーパーをよく知っているせいで、リアリティに引っ張られてしまって。スーパーの労働状況の描写の過剰さが気になってしまいます。

岩渕 面白いと思った。村川さんの作品の不穏さがのっているな、と。空気が書ける人なんだなと思いました。

鳴海 言葉で説明しすぎず、示したいもの、指標になるものを言葉にして置いていく筆致。それが戯曲構造を支えていて面白いです。デッサンとクロッキーの違いを書き分けられています。

やなぎ クロッキーというのはどういう部分？

鳴海 働いているところの描写部分です。構造を押さえるとか、克明さというよりは印象を追っていく描写。逆にト書きのところが記述的、デッサンの印象を受けます。それぞれで言葉の温度が違うのが論理的でした。

岩渕 私は推します。隙間のある空間、あまり血肉が通っていないような、戯曲の書き方から感じられる部分がいいなと。世界がこれだけだと思わない部分もあるけど、村川さんが感じた疑問、結局みんな苦しい、似たような圧を感じていることが戯曲の中で実現している感じがある。

やなぎ 村川さんには上演の形態が見えてると思います。ただ戯曲だけで、評価するのがなかなか難しい。

羊屋 『事件』というタイトル…公の場、街の中で刺される、ということは昔から沢山あって、ニュースではひとつの「事件」と扱われて「ある殺人事件」となることに、その場に居合わせた新鮮さが戯曲からは分からなかった。今ここ、的なドキュメンタリーを感じられない。

鳴海 『禿の女歌手』『ゴドーを待ちながら』のような、タイトルにあるものの周辺をめぐる構造、見えないもの、掴み切れないもの、掴みたいんだけど実態がよく分からないものを、それ自体を巡る形で現そうとする戯曲だと感じました。小説でも良くある手法ではありますが、周辺の巡り方、現実との距離感、没入せずに描写していく態度が「事件」を明らかにしようという誠実さを感じさせます。

## 『ヤツデノコロ』

岩渕 ネガカポジかが機能しているなど感じて良いなと思いました。異常なものを日常的なものにイれて考えられる手つきが面白かったです。ただ、ラストシーン、手が8本が2本になる、で良いのかな？…乙女チックな感じがしたりもして…どうでしょう…？

やなぎ せりふが稚拙な気がします。異形なものが見えない、という大きな話としては安心感があるのですが。

鳴海 差別・被差別の境界線の引き方と、その再発見の視点が、少し古い印象を受けます。

## 『ストロー』

鳴海 外側のおかしな感じと内側の日常が謎めいていて良かったです。22歳の若さに見えている気になることがうまくちりばめられていると感じました。次の作品が見たいです。

## 『Timelineの東』

鳴海 不思議と、京都らしいと感じてしまうんですね。良い手さばきの作品だなと思いました。日常に近い言葉を使って、スピーカーという存在を支えにしながら、日常の隙間を見つけて入っていかうとする好奇心や、隙間から漏れ出て見えてくるものに、作家にとっての美しさ、強さ、弱い物への慈しみを感じます。

羊屋 写真は好き。

やなぎ 取り留めない会話が続く作品で私は掴みどころが分からなかったです。

## 『kq』

岩淵 やって見たらいろいろ面白かったりしそう。

羊屋 『鮭なら死んでるひよこたち』の人が「見えて」いるように、この作者にとって「聞こえる」てるんだろうな、と思った。一度自分でこのディレクションを試しているだろうな、と感じた。これまでも演劇を専門にしていない人からの応募は沢山ありましたが、この作品は作曲家・音楽家にとっての戯曲の範疇のぎりぎり、伸びしろの部分に入っていると思う。喜劇とか悲劇とか、そういうラベリングを超えて、演劇的なことを問われるときにどうするのかなとか、たくらみも感じます。

やなぎ ヨガのインストラクター的なものを感じる。

羊屋 『クバハ、クバから』のような伸びしろの部分の作品はあったほうが良いなとは思っています。言葉の音素まで分解して考えている作品だと思いました。

## 『FOREIGNERS』

岩渕 世界が大きく捉えられていて、面白く読んだ。タイ人のセリフが少ないのも良いなとは思って。

羊屋 私も海外の空港でストライキを起こして飛行機が飛ばない、という経験はある。作者がその場に立ち会っていたのであればもうちょっと書いたらいいのになと思った。概要に書かれていた「偶然に終わりをみえる時間を一緒に過ごすことになった」という言葉が印象的で、それならもう少しその部分を書き込んで欲しかった…既に書かれているのかな。

やなぎ 面白く読みました。空港での不測の事態は、多くの人を経験し、誰かに語りたいたい緊迫の体験です。だから映画をはじめ、よくある設定でもあります。

羊屋 「ターミナル」とかね。

やなぎ 空港という宙吊りの場所で、為す術もない時間に、様々な人が交錯する設定。ありがちな部分をどう考えるか。

鳴海 書かれている言葉を読むかぎり、書きたいことのために設定や状況を設えたり、書きたいことに状況などが付随していることが多いように思いますが、この作品は、実際のところはどうであれ、書きたい状況や場所に動機があるように感じました。それぞれ行きたい場所があって、通過されるための場所に興味を持っているように感じられました。場所の言葉を聞こうとする姿勢から、観察力と良い耳を持っているように思いました。

## 『アながあくほド』

羊屋 一つのワードから言葉を広げていく、越えていく並びの中で「リア王」はこれまでだったら使わなかったと思う。

岩渕 読んでいてのれそうなところとのれなさがあって、良いのか悪いのか判断がつかない。韻を踏んていたりいなかったり、繋がっていたりいなかったり、がどれほど読み手に伝わるものなのかな…。『顔面演劇』と概要にはかかれていても、その描写は無いのでそのつながりが分からない。作者の中で確信はあるんだとは思いますが…

やなぎ オンライン演劇の枠を見据えて作ってるのでしょうか。これがラップであれば、サイファーでバトルしたりも出来るのだけど、1人1パラグラフにまとまっているのが不思議です。

鳴海 これまでとは少し違う雰囲気がありました。とはいえ、レイアウトも構造もほぼ同じ。使われている言葉もライムは、これまで同様ユーモアもあって、チャーミングです。選ばれている言葉は変わっていますが、書かれているものだけでは、もちろんフロウまでは判断できない。ト書きがあるわけでもなく、1ページごとにまとめられている台詞／リリック間の関係性や展開性は、それほど重視していないように読めます。つまり、個別の台詞／リリックを「どうパフォーマンスにするか」に面白みの重心があるように思えます。そうすると、テキストの次の段階が重要になってしまいます。このタイプのテキスト、つまりテキストは素材であって、どうプレイヤーが素材を使うのかにクリエイションの面白さが詰まっている類のテキストが悪いわけでは決してなく、この戯曲賞は上演を審査できるわけではなく、私にとっては書かれているものだけで判断したいと思っているがゆえにフィットしない、マッチさせられないだけなんです。

羊屋 ここまでこのスタイルで一緒にやる仲間がいて続けている、ということが凄い。次は全然違う感じで書いてくるのかな？と思うこともあるけど、やはりこの形式で来る。毎回推しているんだけど、彼の作品を見てはいけない気がして公演は見てない（笑）この言葉から魅力を感じ続けている。

### 『クバへ、クバから』

やなぎ 三野さん、毎年、力作を出してくださる。これだけのものを仕上げるのは大変だと思いますからね。比べても仕方はないんだけど、『Timelineの東』の写真はこの作品と比べたら弱すぎる。いまの写真は、誰でもある程度、感性だけで撮れてしまうところがあるので、だからこそ、言葉とイメージの二足のわらじを履くなら、どちらも必然だという説得力、ふたつの関係に必然がほしいです。この作品は言葉と写真で、めざす上演が出来る確信があるようですね。

鳴海 写真と言葉、物理的に距離がある2つの地点の相違と誤解に係る現象を、どうやって上演として立ち上げるのか、その実験方法や手順が手掛かりとして書いてあるように読めました。単純明快なストーリーはないですが、テキストと写真で表現しうるものだと小さいながら強い確信を持って、作家が書いているのが伝わって来きます。クバ「へ」クバ「から」、という語順も、目的地が先に示されて（へ）、出発地が後に示される（から）あたりも内容と符号します。物語と演劇、右と左の境界線をうろうろするような体験を楽しめました。

羊屋 写真家とのコラボをしたこともあるんだけど、写真の特性である「一瞬を切り取る」強さ、永遠を閉じ込める手法と、演劇の流線形的な時間芸術性、音楽に近いような、お客さんのためにとっておくという手法とを思い

つつ、旅をしながら撮影しているので「旅に寄り添ったらどう読めるかな？」と思いながら読んでいた。

### 『浦島太郎状態』

岩淵 面白かった。読み終わってあれ？となった。無意識を開放して書ける。

鳴海 書きたいことをそのまま書かずに、周辺をたどっていった結果、それらに囲まれたエリアに見えてくるものがある。帰納的な手法がうまく作用していると感じました。

やなぎ うまいと思いました。ずっと水の中にいるような体感が不思議な作品でした。

鳴海 もう少し長く書いてほしかったです。

羊屋 私は短かろうが長かろうが、というスタンスではあるよ。

やなぎ その作品に最適な長さとかあると思う。この作品の場合だったらもう少し長くあるべきだったかなと。

鳴海 内容は身近な場所の歴史に関わる作品。現代と自分をとらえ直す、いわば普遍的なテーマです。会話態においては言葉や文体のバリエーションが少なく、単調なのが惜しく感じました。

羊屋 モノローグは面白いと思う。

### 『ぜんぶジョナサンのせい』

やなぎ 初めて戯曲を書いたんですね。

鳴海 書きたい痛みというか歪みがちゃんと見えているように読めました。それをふまえて誠実に社会の風景を書こうとしている。

岩淵 なんとなく二人の関係性の落としどころが…うーん…ポジティブでもネガティブでも納得いかない。

## 『先生の暗いロッカー』

- 鳴海　　すごく上手い作家だなと思いました。悪い意味ではなくウェルメイドな作品。
- 羊屋　　居ない人、不在の人に関しての会話が抜け落ちず、不在の人がちゃんという感じがする、ち密さが上手いなあと思って読みました。小さい世界の事をここまできちんと書いて読ませるのはすごい。とはいえ、もっと他の戯曲賞にピタッとはまるような気もする…
- 鳴海　　伝統的な物語構造ですが、その意味であっても高い技術とセンスを感じます。

## 『Dokuritusengen』

- 鳴海　　時間と労力をかけて、自分を削って書き上げているように感じました。虚無、空虚、正解や未来への断念、足もとが見えない、孤独、でも見てほしい、希望はあってほしい、書きたいものはまだ見つかっていない焦りのエネルギーなどなどに形が与えられている点で、先行の何人かの作家にも似たものを感じます。実は書きたいものがないことは、残念かもしれないけど、それに対する焦燥感に適する言葉を誠実に選んで置いている印象があります。
- やなぎ　長くて、中盤まで辛いけど、力作だとは思いました。コロナ禍になってから、応募作品に、連帯と分断のテーマが多い。日常会話劇でも、詩的な表現、いろいろあるが、かなりの割合でこのテーマを扱っている。その中でよく書いていると思います。もともと一つだった物が、ばらばらになっていく悲劇。そして最後はよく救ったなど、と思わせる。気持ちの良いラストです。『ぺんだんとはみつからない』とこの作品との二つは最終審査に残したい。
- 岩渕　　熱量、パワーは凄い。いろんなことを書きすぎて、整合性を取ろうとしているのがもったいないなとは思いましたが。ここまで色々なことをかいて、それをロジックで整合性を取ろうとするのではなく勢いで書ききってほしかった。
- 羊屋　　感情的にはすがすがしい怒りを感じる。レーザーでグラフィティのようなものを書くアーティストを思い出しました。それぞれの手法で「怒り」を表現しているというか…

鳴海 引用や参照を含めて、いろいろな視点やモチーフを採用しているが、自分が懂れている、好きな、気になるモチーフの、都合の良い部分ばかりを使っていて、目的のために使っているというよりは、引用や参照が目的化しているようにも読めます。そこから脱却した、作家の言葉の集積を読みたいとも感じました。

岩渕 そういう部分は最終審査でちゃんと言葉にして伝えたほうがいい気がします。彼の真面目さ、開き直るところまでも行かない、カッコつけですと言いつ切るまでも行かない。元も子もないところまでいっているわけでもない。

やなぎ 今のこの状況、社会に対して、真正面から色々なことに影響されながら……最後に海に行っちゃう。若い人は海に行きがちかな(笑)

羊屋 海から、渦に。暴力性を感じる。

以上のような議論を経て、下記8作品が二次審査通過作品となりました。

クバハ／クバから (三野新)

kq (佐々木すーじん)

鮭なら死んでるひよこたち (守安久二子)

事件 (村川拓也)

先生の暗いロッカー (田坂哲郎)

Dokuritusengenn (荒井啓利)

FOREIGNERS (石見真希)

ぺんだんとは みつからない (立田優詞)

上記8作品の中から2022年1月23日公開最終審査会にて大賞・特別賞受賞作を決定します。

作品はウェブサイト、審査会会場等でご覧いただけます

主催：愛知県芸術劇場

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（劇場・音楽堂等機能強化推進事業） | 独立行政法人日本芸術文化振興会

お問合せ：愛知県芸術劇場 TEL: 052-211-7333(10:00~18:00) FAX: 052-971-5541

Email: [ws2@aaf.or.jp](mailto:ws2@aaf.or.jp)